

(2022年12月30日)

## 第9回 赤松小三郎講演会 のご報告

今回で第9回を迎える赤松小三郎講演会は、日比谷図書文化館（千代田区）で新型コロナウイルス感染防止対策をしっかりと行う中で98名が参加のもと、講師に三谷博氏（東京大学名誉教授）をお迎えして開催された。

日時 : 2022年12月10日（土）14:00～16:40

場所 : 日比谷図書文化館 地下1階コンベンションホール

参加者 : 98名（上田高校同窓生33名、一般65名）

◎演題：『赤松小三郎の立ち位置－公論と暴力の比較史を背景に－』

◎講師：三谷博氏（東京大学名誉教授）

<配布資料> (※)印の資料は本報告に添付していますのでご参照ください。

- ① 三谷博講師講演資料
  - ・赤松小三郎の立ち位置－公論と暴力を背景に－(※)
  - ・赤松小三郎 政体建言関係史料(※)
  - ・革命における公論と暴力（革命比較研究会 国際シンポジウム）(※)
- ② 赤松小三郎略年譜（赤松小三郎研究会）(※)
- ③ 「赤松小三郎研究会」入会のご案内(※)
- ④ 「赤松小三郎研究会」最近の活動概要(※)
- ⑤ 「第9回赤松小三郎講演会」アンケート
- ⑥ 2022年赤松小三郎講演会案内チラシ(※)
- ⑦ 三谷博講師著書案内チラシ
  - ・「維新史再考」
  - ・「日本史からの問い」
- ⑧ 「幕末の先覚者 赤松小三郎」案内チラシ

<冒頭に>

- 赤松小三郎研究会 会長 滝澤進より挨拶
- 同研究会 事務局長 小山平六より講師 三谷博氏の紹介
- 同研究会 事務局 荻原貴が司会

<講演要旨>

はじめに

赤松小三郎との出会いは、大学院の学生のころにたまたま上田城址公園に立ち寄った際

に赤松の立派な碑を見つけた時。今日のご縁を得て彼を中心に幕末明治の歴史の話が出来ることを大変光栄に思う。前半で赤松の話をして、後半で幕末明治 20 年の動乱の歴史を話したいと思う。

## 1. 赤松小三郎の政体建言と暗殺

- ・赤松は、慶応 3 年 5 月に、幕府・越前・薩摩に政体改革を建言し、同年 9 月に、薩摩の桐野利秋らにより暗殺された。彼は暴力を使わない平和的な政権の移行・政体そのものの変革、特に議会をどう運営したらよいか、などを唱えたが、皮肉にも暴力（テロリズム）によってこの世から排除されてしまった。
- ・今日は彼の兵学者としての側面や薩摩に与えた影響などには触れない。
- ・グローバルな視点からみると、あらゆる革命で「公論」（公の場で政治の議論をすること）と「暴力」は同時に出現し（赤松は個人としてそれを体現したと言える）、「暴力」を排除して終わる。
- ・革命のグローバル比較～日本の特徴
  - ① 西南の乱（明治 10 年・1877 年）で暴力を排除し、公論の時代が始まった。
    - ・幕末明治の政治動乱の始まりを安政 5 年（1858）とすると、日本は 20 年という短期間で政治動乱を終えることができた。
  - ② 全体として死者が少ない。約 3.2 万人。（フランス革命は約 155 万人）
  - ③ 土地によっては、暴力の応酬がみられた。（水戸、対馬）
  - ④ 政治的決定を平和裏に行った。
    - ・権力者は時として気に入らない人を牢獄に入れるなどするが、西南の乱の後の日本ではめったに起きなかった。国民の意見を汲み上げながら議会制を導入し、努力して運用できるようになった。これは明治維新が終わった後の大きな特徴。
- ・明治維新の大きな変革の特徴を一言で言えば武士がいなくなったこと。約 500 家弱の皇族・華族を除くと国民は全員平等の権利を持つ社会にすっかり変えてしまった。世界の革命の中で最もラディカルな革命だったと言っても良いが、そのラディカルとは決して犠牲者を多く出したことではなかった、ということが重要。

### 赤松小三郎の政体改革建言（慶応 3 年 5 月）

- ・赤松小三郎は、犠牲者の少ない大改革と自由な政治体制の発端に位置するうちの一人である。

#### ○赤松小三郎 政体建言関係史料（添付）

- ① 「御国事御改正之一二件奉申上候口上書覚」（慶応三年五月）（『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』194-198 頁）
  - ・課題：天幕（朝廷と幕府）合体・諸藩（特に幕府と薩摩）一和
  - ・朝廷の宰相 6 人。身分の世襲を廃止、有司（官僚）も身分を問わず人選。旗本を加

えているのは他ではあまり見ない。

- ・二院制の議政局＝議会を提言。下局 130 人、諸国より選出。上局 30 人、公卿・大名・旗本より選出。
- ・両局にて議論・決議→天朝より命令。天朝「御許容無きカ条」は、両局で再議決の場合は議政局より国中に布告。この天皇・大臣に拒否権がないことは、議会主権（⇔君主主権）を意味する。これは赤松の特長。
- ・両局の人選は門閥を問わない云々は男性についてであり、女性の権利については触れていない。明治時代は女性の地位はかえって低下した。

② 「土佐後藤象二郎より差出し候約定書（慶応三年六月）（『玉里島津家史料』補遺二、743-44 頁（いわゆる「薩土盟約」）

- ・「王政復古」「諸侯会議」「人民共和」「二院制の議事堂（議会）」「公平」「人心一和」など、構想の骨格は赤松の建言と酷似していた。そして、全国の人々から支持を得られるために「大条理」ということを強調している。これからの改革は、一部の大名のためのものではなく、日本国中の人々が公平に新政府に参加できるとした。
- ・後藤は重要な政治家に「薩土盟約」を基に次の政府はどうあるべきかを考えるように仕向けた。赤松は後藤とほぼ同じ事を提言したが一譜代大名の家臣で、一方後藤は土佐藩の代表であった。残念ながら影響力が全然違った。

③ 松平春嶽「虎豹<sup>こびょう</sup> 変革備考」（文久三～元治元年）

- ・これは松平春嶽のメモ。春嶽は公議公論運動の中心的な人物で、政事総裁職を務めるなど政界で非常に重要な役割を果たした。

④ 福沢諭吉『西洋事情』初編巻之一（慶応二年七月）

- ・出版されたので赤松も読んでいただろうと思うが、中身はあまり参考にならなかったのではないかな。

⑤ 「政体」（慶応四年閏四月二十一日）

- ・明治新政府が出した法令で、日本最初の憲法。戦後多くの学者はここには人権規定がないという理由で憲法とは言えないというのが常識となっている。しかし当時日本で西洋の憲法を研究した人がどれだけいただろう、ほとんどいなかった。政体には赤松・後藤らが必要な事を考え出し、具現化しようとしたものが詰まっている。
- ・第一条一項「広く会議を興し、万機公論に決す可し」は、幕末政治の中心課題を一行にしてまとめたもの。
- ・ここでは明治政府発足後 5 ヶ月にして江戸時代の世襲身分制をはっきりと公式に否定している。そして大事なのは原則だけでなく実際に実現してしまう。明治 10 年（1877）の西南の乱の後には政府高官の約 2 割が庶民出身者だった。

なぜ赤松は暗殺されたのか

- ・まず、赤松がもし生きていたら赤松は明治時代に随分大きな働きをしたただろうと考えたと、暗殺されたことが残念でならない。
- ・従来の説～赤松はイギリス式の兵学を主に薩摩藩へ、そして会津や他の藩にも教授していた。そして薩摩の軍事機密がほかに漏れることを恐れた薩摩藩が桐野利秋に命じて赤松を暗殺した。
- ・代替説＝桐野利秋単独犯行説～私は桐野らは独自で行動したと考える。後に発見される彼の日記には誰かから暗殺を命令されたという記述はない。桐野らが薩摩藩から命令を受けて赤松を暗殺したというののほうがあった解釈である。暗殺事件（テロリズム）というのは個人の勝手な思い込みで起きる。（例：生麦事件、大津事件、李鴻章襲撃事件）
- ・当時の薩摩藩の動き～薩摩は長州と組んで武力動員を決めた。しかしあくまで武力で圧力をかけて幕府に政権返上させるというシナリオだった。武力討幕ではなかったし、できれば平和的に決着したいと思っていた。よって、王政復古後の政体がテーマだった薩土盟約とは矛盾しない。

## 2. 維新における公論と暴力

### A. 発端：安政五年政変（1858年）

- ・明治維新の政治的動乱はペリー来航の5年後の安政五年（1858）から西南の乱（明治10年・1877年）までの20年間である。この間、公論と暴力が同時に発生し、暴力が大手を振るうという時代になった。その発端が安政五年である。
- ・争点：条約勅許と将軍継嗣があり、当時の老中は条約（対米修好通商条約）勅許問題を先に解決しようとしたが失敗した。一方、京都で「水戸陰謀論」（条約反対論は自分の息子一ツ橋慶喜を将軍にしたい水戸の徳川斉昭が煽って朝廷を味方に付けようとしている）が起きた。→結局、紀州の徳川慶福の嗣立公表
- ・言論による政争：松平慶永（春嶽）らが将軍継嗣問題に介入（一橋擁立は「天下の公論」）。
- ・政府の暴力行使1：井伊大老が一橋派大名を政界から追放。（政府による暴力1回目）
- ・政府の暴力行使2：翌年、政治裁判で処刑（死罪8名、他50人余）。（政府による暴力2回目～江戸時代始まって以来の大規模な政治裁判）

### B. 「公論」とテロの相乗的拡大（万延元年～文久三年）

- ・民間の暴力行使1：桜田門外の変（万延元年・1860）→「公儀」の「御威光」に傷→「公論」禁止タブーが解除された。大変大きな変化。
- ・模倣犯の続出：坂下門外の変（文久2年・1862）、横浜襲撃事件
- ・大名の全国政治参入：名目は「公武一和（朝廷と幕府が仲直りしている）にて我々大名が調停に入る」。長州、薩摩→「幕府」に要求、松平春嶽は

政事総裁職（大老の代りで実質トップ）、一橋慶喜は將軍後見職

- ・ 將軍、尊攘論に翻弄、期限（文久3年・1863年5月10日）を布告 →長州は攘夷戦を開始
- ・ 天皇「親征」を名とする倒幕計画 ⇔ 8・18クーデターで阻止、長州中心の尊攘派を京から追放  
(ここまではテロはあっても戦争はない時代)

## C. 「公武合体」体制の成立と内戦の開始

「公儀」制度化の失敗（元治元年 1864年）

- ・ 朝廷が、薩摩、越前・宇和島・土佐、一橋を招集。「朝議」参与。將軍上洛。天皇との和解成立。～孝明天皇は島津久光を頼り、公武和解を目指した。久光はそのためには天皇と將軍が仲良くするだけではなく、有力大名を取り込む必要があるとして、薩摩・越前は朝議に参加できるようになった。
- ・ 薩摩・越前は「幕議」参与も要求。→老中たちの反対と天皇の意向もあり、両者の調停に当たっていた一橋慶喜は途中で断念した。
- ・ 幕府側、天皇に横浜鎖港を約束 他大名の「衆議」により支持
- ・ 「公武合体」が成就（間に一・会・桑）⇒薩・越離反は短期的には成功だったが、長期的には失敗だった。

武力反乱（同年）

- ・ 水戸天狗党の乱（3月挙兵、水戸戦争、敗北→朝敵に）敦賀で斬首352人/823人
- ・ 長州、禁門の変（7月）大軍上京、敗北→朝敵に（孝明天皇は亡くなるまで長州を許さなかった）
- ・ 第一次征長→三家老等処刑・謝罪、解兵→大名会議論（西郷）  
長州内戦 抗戦派政権成立
- ・ 四国連合艦隊、兵庫で条約勅許要求→大名会議論（大久保）

## D. 「王政」・「公儀」政体への移行（1）

- ・ 征長失敗の後（慶応2年 1866年）  
「御威光」消滅→徳川慶喜、大名会議案を考慮（越前の意見も取り入れようとした）  
→天皇に止められ実現せず→天皇死去、慶喜は孤立
- ・ 四侯会議失敗の後（慶応3年 1867年） ※赤松の登場局面  
慶喜、兵庫開港を獲得、長州赦免を阻止

薩摩、王政復古のため**武力動員**へ、長州と提携

王政復古の政体＝**議会制**につき、土佐と盟約（薩土盟約）

慶喜、土佐の王政復古論に同意、実行（大政奉還）

- ・王政復古の後（明治元年 1868年）

クーデターで新政府成立

「<sup>しんしん</sup>縉紳（公家）・<sup>ぶべん</sup>武弁（武官）、<sup>とうしょう</sup>堂上（昇殿を許された公家）・<sup>じげ</sup>地下（昇殿を許され

ない者）別なく、**至当之公議を竭し**」（身分制をなくし、公議を尽くす）

徳川主導に傾斜（尾・越・土）

鳥羽伏見の戦いで薩・長が戦勝、徳川排除が確定

東北諸藩は新政府に従わなかった

理由 ①公議・公論を知らなかった

②新政府は薩・長の傀儡だと考えた

## E. 「王政」・「公儀」政体への移行（2）

- ・「政体」（上記「赤松小三郎 政体建言関係史料」⑤）

冒頭に五箇条誓文「広く会議を興し**万機公論**に決す可し」

脱身分化

「**賢を尊ぶ**」ため、藩士庶民も二等官まで挙げる

- ・公議所 「公論」により版籍奉還

- ・戊辰戦争の遺産（1）

内戦は東北限定 ⇔ 西日本・中央日本・江戸は無抵抗で政府支持

寛典：廃藩なし（領土没収の上、改めて子弟に領土給与）

徳川宗家：約 700 万石から静岡 70 万石へ

会津：23 万石から 3 万石に（87%減、斗南へ移封）

奥羽越諸藩の大名に死刑なし（代わりに重臣 15 名）

永禁固（松平容保、板倉勝静、松平定敬ら）、謹慎 6 人、隠居 5 人

## 3. 明治初年の公論と暴力

### A. 公論空間のビッグ・バン

- ・幕末までは閉じられた空間で政治の議論が行われたが、明治最初の 10 年で新聞を中心に公論が行われるようになった。
- ・革命（政府転覆）を正当化する新聞まで出てくる。言葉の戦争（公論）から暴力を呼び起こすこともある。

## B. 戊辰戦争の遺産 (2) : 戦勝軍隊の処遇と再乱の待望

- ・西南内乱（明治10年）：（政府の）暴力で（民間の）暴力を鎮圧
- ・板垣退助の選択：武力反乱を断念、言論のみで政府に対抗→民権運動へ

このように日本は明治維新の戦乱をわずか20年で終わらせ、西南の乱後は反動なしに、自由な政治体制を築いた。その間に身分制をなくすなど様々な改革を行ない、立憲制の出発点まで構築したことは凄いことだと思う。

※最後に、スクリーン画面で二つのグラフ「まとめ（維新における暴力と言論の推移）」、「世界比較：体制変革・公論・暴力」の説明があった。

### <質疑応答>

（講演前半終了時）

#### 質疑者1

疑問①：赤松は政体改革建言（慶応3年5月）の中で「国中之人民」と書いていて、また国土防衛のところで「国中之男女」（※）が防衛にあると書いているので、女性参政権も考えていたはずですか。【（※）越前宛提出の建白書・『続再夢紀事』より～報告者追記】

回答：そこまで史料を丁寧に読んでいませんでしたが、しかし、当時「人民」とは「男子」のみを意味していました。

疑問②：赤松の暗殺に関してです。『玉里島津家史料』には赤松の暗殺については載っていませんが、赤松の建白書は載っています。島津久光は赤松を守ろうとしていたことに異論はありませんが、（息子の）島津茂久もちひさの『忠義公史料』ただよしには「赤松はスパイなので殺した」という記述が載っています。桐野が単独で暗殺したとしたら茂久にこんな困ったことを報告しないはずであると考えます。

回答：私の考えは違って、『忠義公史料』はごちゃ混ぜの史料集でソースがあいまいな怪しい物がたくさんあります。藩主手元にあったものではなく、後から集めた史料集です。ですからこれを茂久の意見と考えることはできません。

質疑者：（長州藩の）品川弥二郎の日記に、「黒氏（おそらく薩摩藩の黒田清綱）から赤松が斬首されたと報告を受けた」との記述があります。薩摩と長州が絡んでいると考えます。

回答：「斬首」という言葉があるということは、噂話程度であって、また黒田清綱という薩摩の上層部ではない人物から聞いたことをもって、長州が薩摩に加担していたとは言えません。

質疑者：品川は当時京の薩摩藩邸に駐留して山県有朋、世良修蔵らと赤松が薩摩に軍事訓練をするところを間近で見っていました。慶応3年8月に久光は脚気を患い薩摩に帰った後（9月3日）に暗殺されています。邪魔な久光が京からいなくなったところで、西郷隆盛、大久保利通らが命じたに違いありません。大久保が赤松に送別の宴を申し入れた時に、同席していた桐野が「今日から師弟の縁を切る」と言って門人帳を焼き捨て、翌日桐野が赤松を暗殺しています。大久保もグルだったことは明らかです。

回答：これ以上は史料を見ながら議論をしたいと思います。歴史家の訓練として拡張解釈はできるだけ抑えた方が良いでしょう。推測を重ねていくと事実と離れていってしまう恐れがあるからです。

(講演後半終了時)

### 質疑者2

質問①：明治維新の政体改革はなぜ死者が少なく済んだのですか？

(明治維新：約3.2万人⇔フランス革命：約155万人)

回答：理由は3つ挙げられると思います。

1) 対外戦争（朝鮮と清朝からの干渉）がなかった。

2) 江戸時代の政治体制は双頭連邦国家だった。

二つを一つにすることは、一つをもう一つに替えることよりずっと容易です。二つとは、天皇と将軍。天皇は権力を持っていなかったが絶対的な権威を持っていた、つまり中心が定まっていたので、誰が中心に立つべきか争う必要がなかったということです。

3) 江戸時代を通じて国内の内乱がほとんどなかった。

百姓一揆はありましたがほとんど死者は出ませんでした。日本人は江戸時代から紛争を平和的に解決するということが<sup>ならいせい</sup>習性となっていました。これは今の日本人にも通じるものがあります。ただし、明治以降の日本人は外国人に対しては実に冷酷でした。これはナショナリズムの一般的な特徴でもあります。

### 質疑者3：

質問① 赤松の暗殺で、三谷先生の桐野利秋の単独犯行説には納得できません。桐野が単独で暗殺できたとは思えないし、背後には西郷隆盛がいたと考えますが、単独犯行説の根拠をもう少し詳しく教えてください。

回答：直接の資料は桐野利秋の日記しか残っていません。先ほども言いましたが私は陰謀論は良くないと考えます。陰謀論は確かな証拠があるときだけ採用すべきだと思います。陰謀論をとると人に対する疑いがどんどん膨らんでいきます。安政5年(1858)

が起きたのは長野<sup>よしとき</sup>義言（井伊大老の腹心）が「水戸陰謀論」を組立てたからで



す。それは徳川体制を破壊するほどの影響をもちました。陰謀論は事を荒立てるので、確かな証拠がないかぎり避ける方が良いと思います。

質問②戊辰戦争における東北諸藩は藩閥政府に対して会津藩救済の嘆願書を何度も提出したにもかかわらず、藩閥政府が会津攻めを行った理由をもう少し詳しく教えてください。

回答：東北諸藩が新政府に嘆願書を提出したことは事実です。ちょうど長州戦争の時に鳥取藩が取った行動と同じです。しかし、新政府はかつての長州藩に対してと同様、会津に対してこの原則を認めろ、戦争で敵対したことを謝罪せよと要求していたので、決して最初から戦争を仕掛けるつもりはありませんでした。京都に使者を出して謝罪せよ、と言っているにもかかわらず会津は応じなかったため武力行使するしかなかったのです。もしこれを許したら、明治の日本は成立しなかったと思います。他の大名が勝手な行動を起こす、とくに土佐は薩長に代って天下を取ろうと本気で考えていました。和歌山も軍隊を強化しています。これらを予防するには、会津に対する一罰百戒の「一罰」が必要だったのです。

※質疑応答の終了後に、上田高校関東同窓会の近藤正昭会長から、講演会に対する感想を含め一言ご挨拶をいただきました。

以上

(報告者)

赤松小三郎研究会事務局

荻原 貴 (79期)

赤松小三郎の立ち位置  
— 公論と暴力の比較史を背景に —

三谷 博

# 1. 赤松小三郎の政体建言と暗殺

赤松は、慶応3年5月に、幕府・越前・薩摩に政体改革を建言し、同年9月に、薩摩の桐野利秋らにより暗殺された。

非暴力の政体変革と政権運営を提案した兵学者が暴力により排除された。

→ 革命における「公論」と「暴力」の関係からみて象徴的な存在

## 革命のグローバル比較

17世紀の英国から7つの革命で「公論」と「暴力」の関係を比較  
両者は同時に出現し、暴力を排除して終る。

日本：① 西南の乱で暴力を排除、公論の時代が始った。

② 全体して死者が少ない（約3.2万 ≪ フランス革命：約155万）

③ 土地によっては、暴力の応酬がみられた（水戸、対馬）

④ 決定を平和裏に行う、自由の慣習はどう創られたか（中国との差異）

## 赤松小三郎の政体改革建言（慶応3年5月） ①

- ・ 課題：天幕合体・諸藩一和（とくに幕・薩の融和）  
四侯会議の最中、失敗の直前
- ・ 朝廷の宰相（6人。大君・大名・公卿より。有司も身分をとわず人選）
- ・ 議政局（下局130人：諸国より選出。上局30人：公卿・大名・旗本より）  
議論・決議→建白→天朝より命令（再決議の場合は再申・布告）  
権限：立法（旧例改革、万国普通公平之国律。諸官人選）
- ・ 「門閥を問わず」が頻出

## 後藤象二郎の「薩土盟約」案（同6月） ②

- ・ 「王政復古・・諸侯会議・人民共和、然後、庶幾以て万国に臨んで不恥」
- ・ 朝廷の制度・法制は、議事堂により決定・布告
- ・ 議会は二院制：上院は大名、下院は公卿から陪臣・庶民より選出
- ・ 「公平」「人心一和」

構想の骨格は酷似していた。

## なぜ赤松は暗殺されたのか

- ・「従来の説」とそれに対する私見

「薩摩藩は長州と組んで武力倒幕を決定。その邪魔になった。」（尾崎）

⇒しかし、武力動員は決めたが、発動は抑えていた。

薩土盟約は王政復古後の政体がテーマで、武力発動と矛盾しない。

「薩摩藩内は、久光・京都藩邸・桐野利秋と一体だった。」（寺島）

⇒しかし、久光は長州との倒幕再盟約に関与していない。

大久保や西郷は桐野の動きに気づいていない。

- ・代替説

桐野らは独自行動（参照：生麦事件、大津事件、李鴻章襲撃事件）

藩首脳部は驚愕したはず。手厚い葬儀や藩主からの見舞金はその証拠。

幕府や会津との関係は公然たる政治行動。不都合なら拘束で足る。

テロリズムは勝手な思い込みで起きる（政治的計算を度外視）。

赤松の不利：高官なら警護が厳重（龍馬と同様）

## 2. 維新における公論と暴力

### A. 発端: 安政五年政変 (1858年)

争点: 条約勅許・将軍継嗣 → 京都で「水戸陰謀論」を生成

言論による政争: 松平慶永、一橋擁立は「天下の公論」

政府の暴力行使1: 井伊大老が、一橋派大名を政界から追放

政府の暴力行使2: 翌年、政治裁判で処刑 (死罪8人、他50人余)

### B. 「公論」とテロの相乗的拡大 (万延元年～文久三年)

民間の暴力行使1: 桜田門外の変 (1860年)

「公儀」の「御威光」に傷 → 「公論」禁止タブーが解除

模倣犯の続出 坂下門外の変 横浜襲撃 (渋沢栄一『雨夜譚』)

大名の全国政治参入 長州、薩摩 → 「幕府」は越・一政権に

将軍、尊攘論に翻弄、期限を布告 (1863年) 長州は攘夷戦開始

天皇「親征」を名とする倒幕計画 8.18クーデタで阻止 (戦鬪)

## C. 「公武合体」体制の成立と内戦の開始

### 「公議」制度化の失敗（元治元年 1864年）

朝廷、薩摩、越前・宇和島・土佐、一橋を招集。「朝議」参与  
将軍上洛。天皇との和解成立

薩・越は「**幕議**」**参預**を要求。一旦実現するも、失敗  
幕府側、天皇に**横浜鎖港**を約束 他大名の「**衆議**」により支持  
「公武合体」が成就（間に一・会・桑） 薩・越は離反

### 武力反乱（同年）

水戸天狗党の乱(3月挙兵、水戸戦争、上京、降伏) 斬352/823

長州、禁門の変（7月）大軍上京 敗北、朝敵に

第1次征長 三家老等処刑・謝罪 解兵 → 大名会議論(西郷)

長州内戦 抗戦派政権が成立

四国連合艦隊、兵庫で条約勅許要求 → 大名会議論(大久保)

## D. 「王政」・「公議」政体への移行(1)

征長失敗の後（慶応2年 1866年）

「御威光」消滅 → 徳川慶喜、大名会議案を考慮

天皇に止められ、「合体」体制で幕府強化へ 天皇死去、孤立

四侯会議失敗の後（慶応3年 1867年） ※赤松の登場局面

慶喜、兵庫開港を獲得、長州赦免を阻止

薩摩、王政復古のため**武力動員**へ 長州と提携（~~武力行使~~）

王政復古の政体 = 議会制につき、土佐と盟約

慶喜、土佐の王政復古論に同意、実行

王政復古の後（明治元年 1868年）

クーデタで新政府成立

「縉紳・武弁、堂上・地下別なく、**至当之公議を竭し**」

徳川主導に傾斜（尾・越・土）

鳥羽伏見の戦いで薩・長が戦勝 徳川排除が確定



## E. 「王政」・「公議」政体への移行(2)

### 政体 ⑤

冒頭に五箇条誓文 「広く会議を興し**万機公論**に決す可し」

脱身分化 「**賢を尊ぶ**」ため、藩士・庶人も二等官まで挙げる

徴士→太政官 貢士→議員

公議所 「公論」により版籍奉還

### 戊辰戦争の遺産 (1)

内戦は東北限定 西日本・中央日本・江戸は無抵抗で政府支持

寛典 廃藩なし (領土没収の上、あらためて子弟に領土給与)

徳川宗家：約700万石から静岡70万石へ

会津：23万石から3万石に (87%減 斗南へ移封) 奥羽越諸藩

大名に死刑なし (代わりに重臣15名)

永禁固 (松平容保、板倉勝静、松平定敬ら) 謹慎6人、隠居5人

### 3. 明治初年の公論と暴力

#### A. 公論空間のビッグ・バン

戊辰戦争中に、江戸・ついで関西で新聞発刊（言葉の戦争）  
発禁後、発行奨励に転換 「文明開化」を共有 投書は郵便無料  
経済情報から政治論争へ（明治7年） 民選議院建白  
讒謗律・新聞紙条例改正（明治8年）  
『評論新聞』「圧政政府転覆すべき論」(明治9年) **暴力と相乗**

#### B. 戊辰戦争の遺産(2)：戦勝軍隊の処遇と再乱の待望

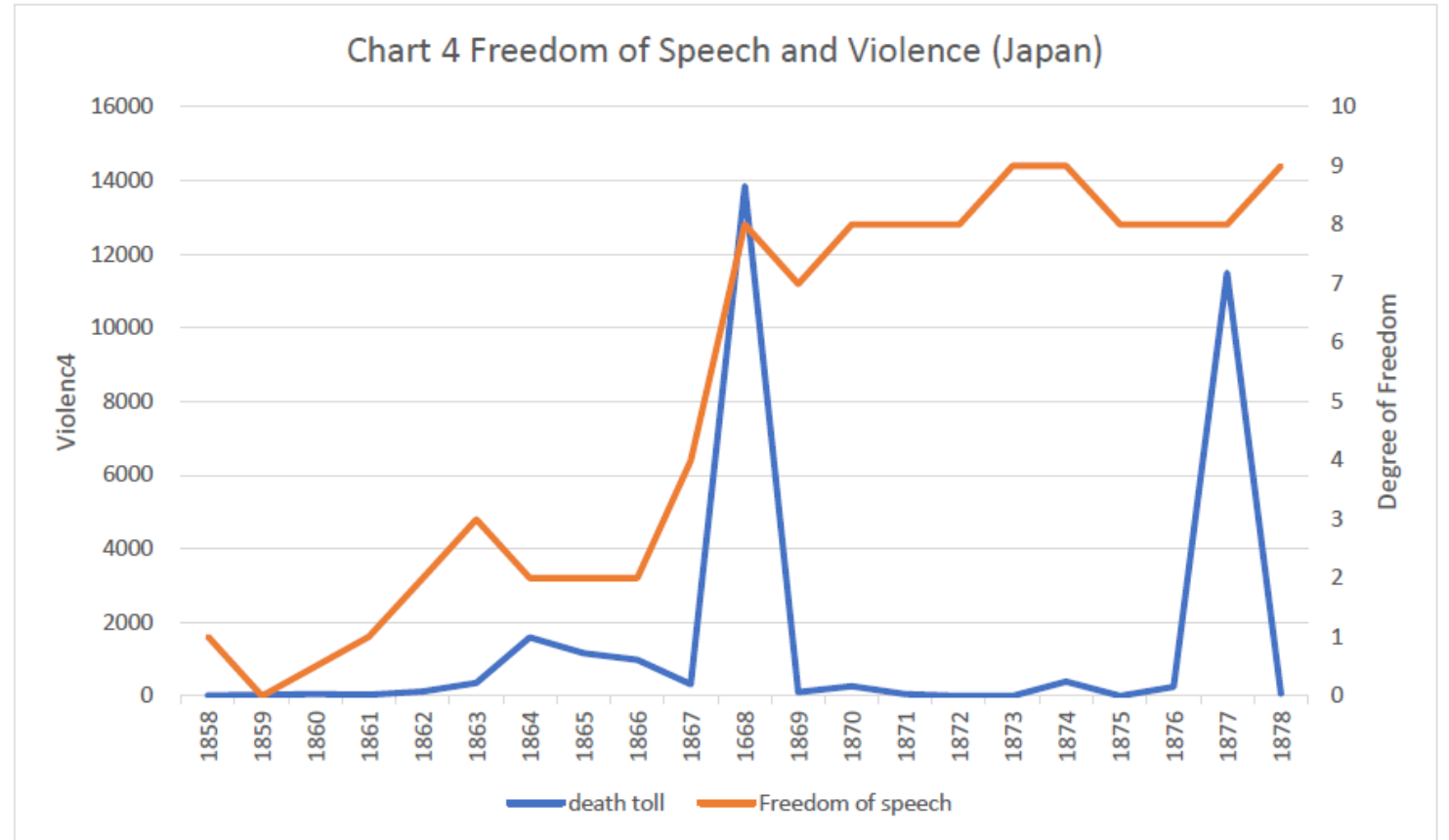
解兵・縮小 → 長州脱隊騒動（明治2・3年）  
親兵に三藩（薩・長・土）献兵（明治4年）  
征韓論政変で、薩・土兵が帰郷（明治6年） 土は再乱を期待  
西南内乱（明治10年）：（政府の）**暴力で**（民間の）**暴力を**鎮圧  
板垣の選択：武力反乱を断念、言論のみで政府に対抗 → 民権運動へ

日本は20年で戦乱を終らせ、反動なしに、自由な政治体制を築いた。

# まとめ（維新における暴力と言論の推移）

明田鉄男『幕末維新全殉難者名鑑』1-4. 青は死者の推移、オレンジは言論の自由度

	death toll	Freedom of speech
1858	12	1
1859	31	0
1860	55	1
1861	28	1
1862	115	2
1863	361	3
1864	1582	2
1865	1154	2
1866	984	2
1867	320	4
1668	13853	8
1869	102	7
1870	271	8
1871	44	8
1872	0	8
1873	0	9
1874	395	9
1875	0	8
1876	253	8
1877	11500	8
1878	63	9



# 世界比較：体制変革・公論・暴力

縦軸：暴力の強度（年・人口ごと）

Clodofelter, 2017より算出

横軸：体制変革の程度

イギリス：赤（小）

アメリカ：緑（小）

フランス：濃紺

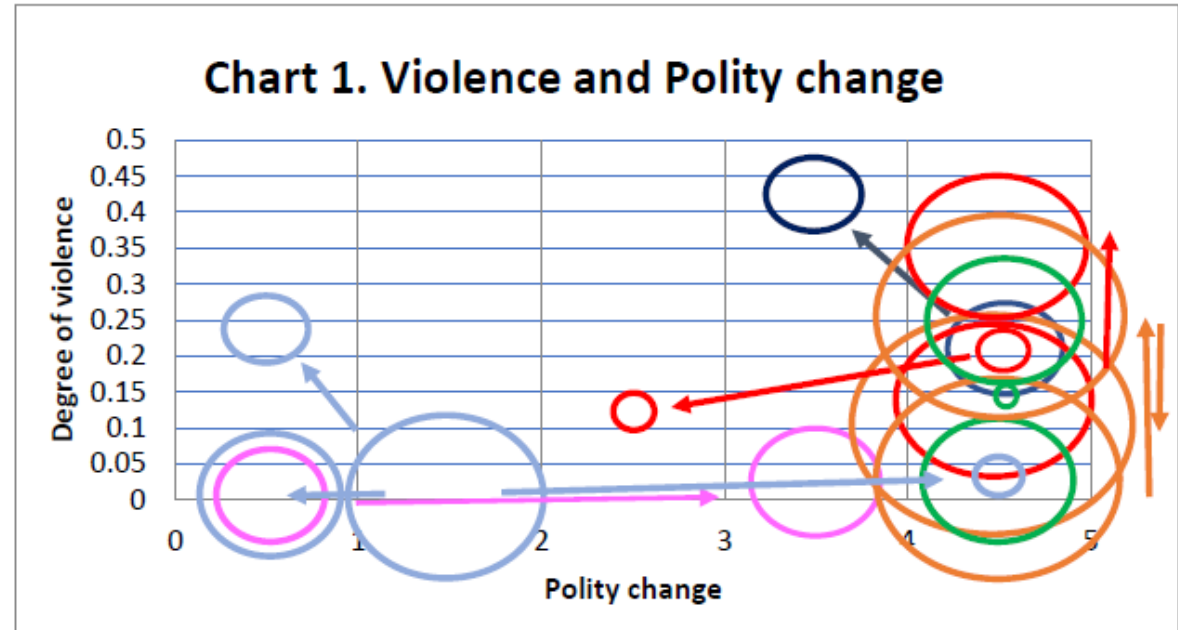
日本：ピンク

ロシア：赤（大）

中国：オレンジ

イラン：緑（大）

アラブの春：水色



アラブの春は三分：内乱継続・独裁復帰・変革定着  
日本は、犠牲僅少で、身分制解体・立憲君主政移行  
イギリスの後半、東欧・北欧に類例（王のいる共和政）

2022年12月10日

赤松小三郎講演会

赤松小三郎 政体建言関係史料

① 赤松小三郎「御国事御改正之一二件奉申上候口上書覚」（慶応三年五月）

『鹿児島県史料 玉里島津家史料五』194-198頁

丁卯五月

数件御改正之儀奉申上候口上書

一、天幕御合体、諸藩一和御国体相立候基本は、先天朝之権を増し徳を奉備、并に公平に国事を議し、国中に実に可被行命令を下して、少も背く事能はざるの権有る局を御開立相成候事。

蓋、権之歸すると申は、道理に叶候公平之命を下し候へば国中之人民承服仕候は必然之理に候。第一、天朝に徳と権とを備え候には、天子に侍する宰相は大君・堂上方・諸侯方・御旗本之内、道理に明にして方今之事務に通じ、万国之事情を知り候人を選て六人を侍せしめ、一人は大閣老にて国政を司り、一人は錢貨出納を司り、一人は外国交際を司り、一人は海陸軍事を司り、一人は刑法を司り、一人は租税を司る宰相とし、其以下之官吏も皆、門閥を論ぜず人撰して、天子を補佐し奉り、是を国中之政事を司り、且命令を出す朝廷と定め、亦別に議政局を立て、上下二局に分ち、其下局は国之大小に応じて諸国より数人づゝ道理に明なる人を自国及隣国之入札にて撰抽し、凡百三十人を命じ、常に其三分之一は都府に在らしめ、年限を定めて勤めしむべし。其上局は堂上方・諸侯・御旗本之内にて入札を以て人選し、凡三十人を命ぜられ、交代在都して勤むべし。

此両局にて総て国事を議し、決議之上天朝へ建白し、御許容之上、天朝より国中に命じ、若し御許容無きケ条は議政両局にて再議し、弥公平之説に歸すれば此令は是非共下さるゝを得ざる事を天朝へ建白して、直に議政局より国中に布告すべし。

其両局人選之法は、門閥貴賤に拘らず、道理を明弁し、私無く且人望之歸する人を公平に選ぶべし。其局の主務は旧例之失を改め、万国普通之法律を立、并に諸官之人選を司り、万国交際・財貨出入・富国強兵・人才教育・人気一和之法律を立候を司り候儀、御開成相成候儀、御国是之基本かと奉存候。

一、人才御教育之儀、御国是相立候基本に御座候事。（下略）

一、国中之人民平等に御撫育相成、人々其性に準て充分を尽させ候事。（下略）

一、是迄之通用金銀総て御改、万国普通之錢貨御通用相成、国中之人口と物品と錢貨と平均を得候様御算定之事。（下略）

一、海陸軍御兵備之儀は治世と乱世との法を分ち、国の貧富に応じて御算定之事。（下略）

一、船艦并に大小銃其外兵器、或は常用之諸器械・衣食等製造之機関、初は外国より御取寄せ、国中是に依て物品に不足無き様御処置之事。（下略）

一、良質之人馬及鳥獸之類御繁種之事。（下略）

(前略) 斯く御国政にも関り候儀を申上候は甚恐入候得共、心付候儀を黙止仕候も却て不本意と奉存候間、乍恐浅見之一二端申上候。何卒右件々被遊御尽力、方今適當・万国普通公平之御国律相立、天幕御合体・諸藩一和相成候様奉懇願候。昧死稽首

慶応三年丁卯五月

松平伊賀守内

赤松小三郎

② 「土藩後藤象二郎より差出し候約定書（慶応3年6月）

『玉里島津家史料』補遺二、743 - 44 頁

方今皇国の務、国体制度を糺正し、万国に臨んで不恥、是第一義とす。

其要

王政復古、宇内の形勢を参酌し、天下後世に至て、猶其遺憾なきの大条理を以て処せん。

国に二王なし、家に二主なし。政権一君に帰す。是其大条理。(中略) 制度一新、政権朝に帰し、諸侯会議・人民共和、然後庶幾以て万国に臨んで不恥。是を以て初て我皇国の国体、特立する者と云べし。(中略) 爾後執心公平、所見万国に存す。此大条理を以て此大基本を立つ。今日堂々諸侯之責のみ。成否顧る所に非ず。斃て後已ん。

(中略)

一、天下の大政を議定する全権は朝廷に在り。我皇国の制度・法則、一切の万機、京師の議事堂より出ざるを要す。

一、議事院を建立するは宜しく諸藩より其入費を貢献すべし。

一、議事院上下を分ち、議事官は上公卿より下陪臣庶民に至る迄、正義純粹の者を選挙し、尚諸侯も自ら其職掌に因て上院の任に充つ。

一、將軍職を以て天下の万機を掌握するの理なし。自今宜く其職を辞して諸侯の列に帰順し、政権を朝廷に帰す可きは勿論なり。

一、各港外国の条約は、兵庫港に於て新に朝廷の大臣・諸侯の士大夫と衆合し、道理明白に新約定を立て、誠実の商法を行ふべし。

一、朝廷の制度・法制は往昔よりの律例ありといへども、当今の事務に参じ或は当らざる者あり。宜く其弊風を一新改革して、地球上に愧ざるの国本を建ん。

一、此皇国興復の議事に関係する士大夫は私意を去り公平に基き、術策を設けず、正実を貴び既往是非曲直を不問、人心一和を主として此議論を定むべし。

右議定せる盟約は方今之急務。天下之大事、之に如く者なし。故に盟約決議之上は何ぞ其事之成敗利鈍を視んや。唯、一心協力永く貫徹せん事を要す。

慶応三年丁卯六月

③ 松平春嶽「虎豹変革備考」(文久3～元治元年) 『松平春嶽全集』二、93-100頁  
(前略)

○公武御一和は、第一従幕府真に天朝を崇奉せられ、征夷之御職任を御尽し被為遊候儀、肝要之事。

(中略)

○徳川御一家之儀は、於関東精誠尽衆議、施行当然之事に候得共、天下至重至大之事件、万人之生活にも可関係事は一々天朝え御伺、経奏聞、待叡旨、御取行可相成事。

(中略)

○親藩外藩之差別なく世に有名之諸侯を挙用して、これを幕府の上に登せて、天下公共之論を下院にとりて、又公共之論を議して、幕府より朝廷え御伺ひ可有之事。

(中略)

○大樹公自ら幕府旧来之自重を廃して、諸侯同等之礼儀を被為用度事。

(中略)

(中略)

○天下公共之論を議してこれを用るには、巴力門・高門士、則上院下院之挙なくんばあるべからず。満清・日本之制度は自ら権を政府に掌握して恣に賞罰黜陟を用ゆ。西洋諸洲之史をみるに、ハルリモン、コンモンズありて、国中之政事を公共之論議に登せ、これを賞罰黜陟せしめ、与奪といへども又然り。英の王も仏の帝といへどもこれを自由にする事を得ず。今皇朝之制度も一変革して、巴力門を江戸に、高門士を江戸に創建し、此巴力門は幕府の臣下又は諸侯の内なるべく、高門士は諸藩士の有名之者也。

○又は巴力門を諸侯の藩士に命じ、高門士は百姓町人、又は庶人を加ふるも一法なるべし。

○天子・將軍といへども、此公共之論にいたっては、これを動揺する事を得ず。

④ 福澤諭吉『西洋事情』初編卷之一(慶応二年七月) 『全集』1、289頁  
(前略)

一、政治に三様あり。曰く立君(モナルキ)。礼楽征伐一君より出。曰く貴族会議(アリストクラシ)。国内の貴族名家相集て国政を行ふ。曰く共和政治(レポブリック)。門地貴賤を論ぜず、人望の属する者を立て、主長となし、国民一般と協議して政を為す。又立君の政治に二様の区別あり。唯国君一人の意に随て事を行ふものを立君独裁(デスポット)と云ふ。魯西亞、支那等の如き政治、是なり。国に二王なしと雖も、一定の国律ありて君の権威を抑制する者を立君定律(コンスティテューショナル・モナルキ)と云ふ。現今歐羅巴の諸国、此制度を用ゆるもの多し。○斯の如く三様の政治、各々其趣を異にすれども、一国の政に之を兼用するものあり。即ち英国の如き、血統の君を立て、王命を以て屋内に号令するは立君の体裁なり。国内の貴族、上院に会して事を議するは貴族会議の政治なり。門閥を問わず、人望の歸する者を選挙して下院を建つるは共和政治なり。故に英国の政治は三様の政治を混同せる一種無類の制度なり。(下略)

⑤ 政体（慶應4年閏4月21日） 『法令全書』（内藤『内閣制度の研究』で校訂）

政体

一、大に斯国是を定め、制度規律を建つるは 御誓文を以て目的とす。

- 一 広く会議を興し、万機公論に決す可し
- 一 上下心を一にして、盛に経綸を行ふべし
- 一 官武一途、庶民に至るまで、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す
- 一 旧来の陋習を破り、天地の公道に基く可し
- 一 智識を世界に求め、大に 皇基を振起す可し

右 御誓文の条件相行はれ、不悖を以て旨趣とせり。

一、天下の権力、総てこれを太政官に帰す。則ち政令二途に出るの患無からしむ。太政官の権力を分つて立法行法司法の三権となす。則偏重の患無らしむるなり。

一、立法官は行政官を兼ねるを得ず。但し、臨時都市巡察と外国応接との如き、猶立法官得管之。

一、親王公卿諸侯に非ざるよりは、其一等官に昇を得ざる者は、親親・敬大臣の所以なり。藩士庶人と雖ども徴士の法を設け、猶其二等官に至るを得る者は、貴賢の所以なり。

一、各府各藩各県、皆貢士を出し、議員とす。議事の制を立つるは輿論公議を執る所以なり。



# 革命における 公論と暴力

—体制変革のグローバル比較—

日時：

2023年1月7日・8日

7日：9:30-17:30 / 8日：9:00-17:30

場所：

東京大学 (本郷キャンパス)

法文2号館2階 1番大教室

※オンライン配信予定 (詳細はHPにて後日公開)

言語：日本語・英語 (一部同時通訳付)

参加登録：要 参加費：無料

## 参加登録方法

研究会ホームページより参加登録をお願いします  
(QRコードからHP該当ページへ入れます)

[HTTPS://KAKUMEIHIKAKU.  
JIMDOSITE.COM/](https://kakumei.hikaku.jimdosite.com/)



## 1日目

基調報告：三谷博

第1セッション：中東  
酒井啓子/Juan Cole  
▶ 深町英夫  
\*\*\*

第2セッション：中国  
深町英夫/石川禎浩  
▶ Jeffrey Wasserstrom

第3セッション：ロシア  
池田嘉郎/Merissa Stockdale  
▶ 石川禎浩

ラウンドテーブル

## 2日目

第1セッション：アメリカ・フランス  
鰐淵秀一/  
早川理穂/平正人  
▶ David Bell

第2セッション：イギリス  
Michael Braddick  
/後藤はる美  
▶ 三谷博  
\*\*\*

第3セッション：日本  
朴薫/塩出浩之  
▶ 岩井淳

総合討論  
渡辺浩

結語  
山崎耕一  
/Michael Braddick

INTERNATIONAL SYMPOSIUM

# PEN AND SWORD IN REVOLUTIONS : A GLOBAL COMPARISON

Date :

7th / 8th January 2023

7<sup>th</sup> Jan. 9:30-17:30 / 8<sup>th</sup> Jan. 9:00-17:30 (JST)

Venue :

The University of Tokyo (Hongo)  
Ichidai Lecture Hall, Faculty of Law & Letters Bldg.2  
with Zoom (for details see the updates on our website)

Language : [Japanese](#) and [English](#) Fee : [Free](#)  
Simultaneous interpretation available for discussions

Sign up here:

[HTTPS://KAKUMEIHIKAKU.  
JIMDOSITE.COM/](https://kakumeihikaku.jimdosite.com/)



■ Email: [hikaku.kakumei@gmail.com](mailto:hikaku.kakumei@gmail.com)  
□ KAKENHI 19H01302 (Hiroshi Mitani, Toyo Bunko)

For further details  
see our website

7 JANUARY (SAT)

Keynote Address:

**Hiroshi Mitani**

Session 1 : [Middle East](#)

**Keiko Sakai/Juan Cole**

▶ **Hideo Fukamachi**

\*\*\*

Session 2 : [China](#)

**Hideo Fukamachi/**

**Yoshihiro Ishikawa**

▶ **Jeffrey Wasserstrom**

Session 3 : [Russia](#)

**Yoshiro Ikeda/**

**Merissa Stockdale**

▶ **Yoshihiro Ishikawa**

Round Table

8 JANUARY (SUN)

Session 1 : [America & France](#)

**Shuichi Wanibuchi**

**Riho Hayakawa/**

**Masato Taira**

▶ **David Bell**

Session 2 : [Britain](#)

**Michael Braddick/**

**Harumi Goto**

▶ **Hiroshi Mitani**

\*\*\*

Session 3 : [Japan](#)

**Hun Park/Hiroyuki Shiode**

▶ **Jun Iwai**

General Discussion

**Hiroshi Watanabe**

Closing Remarks:

**Koichi Yamazaki/**

**Michael Braddick**

## 赤松小三郎略年譜

(赤松小三郎研究会)

元号	西暦	年齢	赤松小三郎の事績	日本の動き
天保2	1831	1	4月、信州上田藩士芦田勘兵衛の次男として誕生。(幼名清次郎 兄は柔太郎)	
天保8	1837	7	幼少より、叔母の夫植村重遠に算数を学ぶ。	
天保13	1842	12		(8月、アヘン戦争で清国惨敗)
天保14	1843	13	藩校に入学し、漢籍と武技を学ぶ。	
嘉永元	1848	18	江戸に出て、数学者内田弥太郎のマテマカ塾に入り、算数、天文、測量、暦学、地理、蘭学等を学ぶ。	
嘉永2	1849	19		10月、上田藩主松平忠優、老中に就任。
嘉永5	1852	22	西洋兵学者の下曾根信敦塾に入り、蘭学、砲術等を学ぶ。	
嘉永6	1853	23		6月、米国ペリー艦隊浦賀に来航
嘉永7	1854	24	春、上田藩士赤松弘の養子となる。 夏、勝海舟に入門する。	3月、日米和親条約締結。
安政2	1855	25	10月、勝海舟の内侍(従者)として、長崎海軍伝習所に入所し、蘭学、兵学、航海術等を学ぶ(安政6年4月頃まで)。	8月、松平忠優、老中を罷免される。
安政4	1857	27	7月、オランダの兵書「新銃射放論」を翻訳。	9月、松平忠固(忠優を改名)、老中に再任される。
安政5	1858	28	オランダの兵書「矢ごろのかね 小銃撃率」を翻訳・出版。	4月、井伊直弼、大老就任。 6月、日米修好通商条約調印 6月、松平忠固、老中を罷免される。 9月、安政の大獄始まる。
安政6	1859	29	4月、長崎海軍伝習所の廃止に伴い、長崎から江戸に帰る。	9月、松平忠固死去。

万延元	1860	30	咸臨丸に乗船を希望するもかなわず。 3月、養父赤松弘没し、赤松家を継ぐ（赤松清次郎）。	1月、咸臨丸、浦賀出発。 3月、桜田門外の変。
文久元	1861	31	10月、小三郎に改名する。	
文久2	1862	32	7月、上田藩で、調練調方御用掛を命じられる。	1月、坂下門外の変。 8月、生麦事件。
文久3	1863	33	春、松代藩士の娘と結婚する。 4月、佐久間象山と松代で初めて会談、以後、象山と交流する。 上田藩に藩政改革意見書を提出する。	5月、長州藩、下関で外国船を砲撃。 7月、薩英戦争。 8月18日の政変。
元治元	1864	34	7月、佐久間象山、京都で暗殺される。 11月、江戸から横浜のイギリス公使館付武官アプリン大尉等を訪ね、英語やイギリス兵学等を学ぶ（元治2年3月まで）。	7月、蛤御門の変。 8月、4国連合艦隊下関砲撃。 7月～12月第一次長州征討。
慶応元	1865	35	2月、下曾根信敦塾に再入門する。 4月、「1862年施條銃式英国歩兵練法」の翻訳を始める。	
慶応2	1866	36	3月、下曾根稽古場蔵版として、「1862年施條銃式英国歩兵練法」（5編8冊）を出版する（浅津富之助と共訳）。 8月、幕府へ、長州征討を批判し、有能な人材の登用、兵制の改革刷新等を求める建白書を提出する。 9月、上田藩主へ、人材の登用、言論の自由、藩主自身の取るべき姿勢等について建白書を提出する。 10月、京都で、江戸へ出立直前の勝海舟を訪ねる。京都衣棚で兵法塾を開き、英国式兵法教授などを行う。後、薩摩藩邸に招かれて、兵法教授、調練等を行い、会津藩でも調練等を行う。 11月、幕府、上田藩に、小三郎の開成所教官兼海陸軍兵書取調役採用を打診する。 12月、上田藩、幕府の小三郎採用を断わる。	1月、薩長盟約。 6月～8月、第二次長州征討。 7月、将軍家茂急死。  福沢諭吉、「西洋事情」を出版。  12月、徳川慶喜、将軍就任。 12月、孝明天皇急死。

慶応3	1867	37	<p>5月、薩摩藩からの依頼により「薩摩蔵版重訂英国歩兵練法」（7編9冊）を刊行する。</p> <p>5月～ 幕府、越前藩松平春嶽（前幕府政事総裁職）、薩摩藩島津久光等に議会政治等を提唱する建白書（「建白七策」）を提出する。</p> <p>8月頃、幕府と薩摩藩の間を取り持つ（幕薩一和）ため、西郷隆盛、若年寄永井尚志らと談合する。</p> <p>8月末、上田藩の命により、いったん帰藩する決意をする。</p> <p>9月3日、京都5条東洞院魚棚下ルにおいて、薩摩藩士中村半次郎（桐野利秋）らによって暗殺される。</p>	<p>1月、明治天皇踐祚。</p> <p>5月、四侯会議。</p> <p>6月、薩土盟約締結。</p> <p>8月、薩摩藩武力討幕派、長州との挙兵計画を策定。</p> <p>9月、薩摩藩、土佐藩との盟約を破棄。</p>
(参考)				
明治39	1906		<p>5月、小三郎の弟子であった東郷平八郎大将与上村彦之丞中将は、伊東祐享元帥とともに上田を訪問し、小三郎の霊位に弔祭料を供えた。</p>	
大正13	1924		<p>従五位を追贈された。</p>	

## **「赤松小三郎研究会」入会のご案内**

2022年12月10日

赤松小三郎研究会（上田高校関東同窓会）

当研究会は、赤松小三郎や幕末史に関心をお持ちの多くの皆さまのご入会を心からお待ちしております。上田高校同窓生の皆さまに限らず、どなたでも入会大歓迎です。次ページの入会申込書をご利用ください。

### **（幕末の上田藩士、赤松小三郎）**

幕末の上田藩士、赤松小三郎は、京都の薩摩藩邸や会津藩邸などで西洋兵学などを教え、東郷平八郎はじめ多くの英才を育てました。また、他の誰よりも早く、議会制度の創設などわが国近代化に向けてのグランドデザイン（憲法構想）「建白七策」を起草し、前政事総裁職の松平春嶽、薩摩藩国父の島津久光など政局のキーマンにその実現を働きかけるなど、わが国の近代化のために全力を尽くしました。しかし、慶応3年（1867年）9月3日、37歳で、弟子の中村半次郎（桐野利秋）など薩摩藩士によって暗殺されました。

赤松小三郎の先進的な政治思想と優れた洋学の教えは、日本の近代化に大きな役割を果たしましたが、志半ばで暗殺されたこともあり、これまで、小三郎の事績について、十分な歴史的評価が行われてきたとは言い難い状況にあります。

### **（研究会の設立目的とこれまでの活動概要）**

赤松小三郎研究会は、赤松小三郎の事績を明らかにし、歴史的な再評価を実現するとともに、広く幕末史への理解を深めることなどを目的として、2013年8月、上田高校関東同窓会の同好会として設立されました。

この間、多くの皆さまのご支援をいただきながら、8回の講演会を含め、40回を超える会合を重ねることができ、多くの成果を挙げることができました。

### **（研究会例会の活動内容）**

当研究会の例会は、現在、偶数月の第2土曜日、午後2時から2時間程度開催されており（会費は実費500円程度）、毎回、20名程度が出席しています。

例会では、研究会会員や有識者から、赤松小三郎や幕末史などに関するさまざまなテーマについて、調査・研究の成果が発表され、この発表を基に活発な意見交換を行っています。これらの活動の概要は、毎回、上田高校関東同窓会ホームページの「会の活動・同好会活動」において、公開しております。

<http://uedakant.sakura.ne.jp/>

また、佐野鼎研究会、幕末史研究会など他の研究会などとの交流も活発に行っております。

### **(入会のお誘い)**

赤松小三郎研究会では、活動の充実・強化のため、赤松小三郎はじめ幕末史に関心をお持ちの皆さまに、当研究会に是非ともご入会いただきたいと念願しております。

なお、この研究会には、上田高校同窓生に限らず、赤松小三郎や幕末史に関心をお持ちの方であれば、どなたでも入会を大歓迎いたします。

### **(入会のお申込み・お問い合わせ)**

当研究会への入会をご希望の方は、下記入会申込書に、入会金1000円を添えて、お申し込みくださいますよう、お願い申し上げます。

また、入会や活動状況等についてのお問い合わせは、下記までお願い申し上げます。

赤松小三郎研究会事務局長 小山平六

Eメール：[kannazuki-6318@kxb.biglobe.ne.jp](mailto:kannazuki-6318@kxb.biglobe.ne.jp)

電話：070-2685-2384

————— (切り取ってご提出ください。) —————

## **赤松小三郎研究会入会申込書**

**入会金1000円を添えて、次のとおり入会を申し込みます。**

**2022年 月 日**

**お名前** : \_\_\_\_\_ (上田高校同窓生の場合 期)

**お電話番号** : \_\_\_\_\_

**メールアドレス** : \_\_\_\_\_

**ご住所** : \_\_\_\_\_

## 「赤松小三郎研究会」最近の活動概要

(2020年2月8日～2022年10月8日)

- \* 各回の詳しい内容は、上田高校関東同窓会ホームページの[会の活動・同好会活動](https://uedakant.sakura.ne.jp/)の[赤松小三郎研究会](https://uedakant.sakura.ne.jp/)をご参照ください。<https://uedakant.sakura.ne.jp/>

### 第40回赤松小三郎研究会

日時：2022年10月8日(土) 午後2時～4時40分

- 赤松小三郎と赤松大三郎について
  - ・ 報告者：石川浩氏
  - ・ 概要：赤松小三郎と赤松大三郎のそれぞれの先祖についての調査の結果、小三郎の赤松家は別所頼清の末裔であり、大三郎の赤松家は赤松義則の庶流の苗裔であって、両家は赤松家として遠い先祖は同じであったと思われるが、赤松家本流の子孫ではない、との報告が行われた。
- 赤松小三郎建白書の謎(まとめ)
  - ・ 報告者：石川浩氏
  - ・ 概要・盛岡藩の「慶応丁卯雑記」に写された幕府あて建白書及び嵯峨根良吉の「時勢改正」について、これまでのまとめとして、次のような報告が行われた。
    - ・ 「慶応丁卯雑記」の幕府あて建白書には「赤松小太郎」の名があるが、小三郎本人が書いた場合には必ずある「松平伊賀之守内」がないことなどから、「赤松小太郎」は建白書を写した盛岡藩士と推定する。
    - ・ 幕府あて建白書は、「徳川慶喜公伝」には記載がないことなどから、慶喜には届いておらず、盛岡藩の「慶応丁卯雑記」に写された建白書は、盛岡藩士が、永井尚志や原市之進の側近から入手して読み、「慶応丁卯雑記」に写したものと推測する。
    - ・ 嵯峨根の「時勢改正」の内容は、小三郎の建白書が箇条書きされたもので、大きな違いはない。各項目の最後には「趣意なり」の表現もあり、何かを書き写したような表現である。また、幕府寄りの表現が見当たらない。以上から、嵯峨根は、小三郎の建白書を箇条書きにし、久光に提出し、その評価を得て軍事教授として採用されたものと考えられる。
- 赤松小三郎と山本覚馬
  - ・ 報告者：滝澤進氏
  - ・ 概要：報告では、小三郎と覚馬について、まず、両者の接点及び共通点と相違点を探り、覚馬の生涯、思想を概観した。その上で、小三郎の「建白七策」と覚馬の「管見」を比較するとともに、両者の幕末における連携した政治活動の概



要・意義等について、調査の結果が報告され、次のようなまとめが行われた。

- ・ 小三郎と覚馬は、ほぼ同世代の武士であり、ともに、日本の近代化に向けて、渾身の力を揮い、大きな業績を残した。
- ・ 両者は、ともに、わが国の政治・社会等の近代化のためのグランドデザインを描くとともに、慶応3年には、幕薩一和のために、連携した政治活動を行った。
- ・ 小三郎は、若くして命を奪われたが、「建白七策」に示されたその思想は、薩土盟約となった後藤象二郎の提案に大きな影響を与えるとともに、覚馬の「管見」やそれをベースとした京都における様々な活動等を通じ、日本の社会、産業、教育等の近代化に大きな役割を果たした。

### 第39回赤松小三郎研究会

日時：2022年6月11日（土）午後2時～3時半

#### ○ 赤松小三郎建白書の謎

- ・ 報告者：石川浩氏
- ・ 概要：「建白七策」をめぐる謎として、次の2点が提起された。
  - ① 松平春嶽あての建白書と島津久光あての建白書とを比較すると、「海陸軍御兵備之儀ハ…」の条文において、春嶽あてのものは「乱世ニハ国中之男女尽ク兵ニ」となっているのに対し、久光あてのものは「乱世ニハ国中之男子尽ク兵ニ」となっている。小三郎が薩摩藩における「男尊女卑」の精神に気配りしたとも考えられるが、その理由は謎である。
  - ② 盛岡藩の「慶応丁卯雑記」に写された幕府あて建白書と言われるものと松平春嶽あての建白書とを比較すると、「慶応丁卯雑記」に写された建白書では建白者が「赤松小太郎」となっており「松平伊賀守内」が抜けているとともに、文面に写し間違いとは思えない大きな違いが何か所もある。何故このような違いが生じたのか、謎である。

#### ○ 今後の研究会の進め方について

- ・ 進行役：滝澤進氏
- ・ 概要：赤松小三郎研究会の活動内容及び当面の課題についてのレビューの後、研究会の今後の進め方として、①研究テーマの設定、②研究成果等の公表、③小三郎をめぐる史実の“学習”、④他の研究会等との交流の拡大の4点が提起され、今後も、研究会の活動状況、研究成果等を上田高校関東同窓会のホームページで積極的に公表すること、赤松小三郎ゆかりの地を巡るツアーを企画すること、等の意見が出された。

### 第38回赤松小三郎研究会

日時：2022年4月9日（土）午後1時半～4時半

#### ○ 「田原記聞」の四〇三条を分類・分析

- ・ 報告者：石川 浩氏
- ・ 概要：天保年間（1840年代）に、上田藩士で砲術家の八木剛介は、三河田原藩の砲術家村上定平（範致）から学んだ内容を「田原記聞」に記録したが、その内容は、砲術、世界情勢、火薬調合、鑄造技術、馬術など多岐にわたり、村上の「銃陣初学鈔」の内容のみを記述した史料ではないことが紹介された。

#### ○ 西郷隆盛は（明治政府）は国家経営の青写真（設計図）を持っていなかった。

- ・ 報告者：沓掛 忠氏
- ・ 概要：幕末の紀州藩士津田出（いずる）が藩主徳川茂承（もちつぐ）の命によって行った藩政の大改革は、新国家経営の青写真（設計図）を持たなかった明治新政府の改革・施策に大きな影響を与えるものであったとして、次のような報告が行われた。
  - ・ 津田出は、元紀州藩士で当時新政府の実力者であった陸奥宗光の支援を得て、「財政改革」、「家禄制の撤廃」、「四民平等」（身分制の撤廃）、「郡県制」、「三権分立」、「徴兵制」、「陸海軍の設立」、「殖産興業」、「貿易の推進」など、藩政の大改革を行った。
  - ・ 岩倉海外使節団と留守政府との間では、重要な決定をしないことなどが約束されていたが、西郷隆盛らの留守政府は、津田らが紀州藩でやり遂げた藩政改革の実績を検証・確認した結果、これらは明治政府でも十分できるはずであり、かつ必要なこととして、海外視察団の帰国を待たずに、「徴兵令」、「学制改革」、「地租改正」、「太陽暦の採用」などの改革を思い切って実施した。また、明治政府にとって最悪を想定した混乱が避けられたのは、御親兵として備えた常備軍約12,000名の存在があったからである。

#### ○ 第8回赤松小三郎講演会の報告

- ・ 報告者：荻原貴氏
- ・ 概要：第8回赤松小三郎講演会の概要が報告された。

### 第8回赤松小三郎講演会

日時：2021年12月12日（土）午後2時～午後4時半

演題：赤松小三郎と勝海舟

講師：安藤優一郎氏（歴史家）

ポイント：

- ・ 赤松小三郎（天保2年（1848）生まれ）と勝海舟（文政6年（1823）生まれ）は、ともに下級武士の生まれで、立身のために、勉学に励んだ。
- ・ 海舟は、嘉永3年（1850）、江戸に蘭学・兵学塾を開いたが、小三郎は、安政元年（1854）、海舟に入門し、翌年海舟の従者として長崎海軍伝習所に入所した。
- ・ 海舟は、万延元年（1860）、咸臨丸を指揮して渡米するが、乗船を強く希望していた小三郎の願いは叶わなかった。
- ・ その後、小三郎は、上田藩で、調練調方御用掛などとして、雌伏の時を過ごす。元治元年（1864）12月には、江戸で海舟を訪ねている。
- ・ この間、小三郎は、横浜で英国陸軍士官から英語や英国兵法を学び、慶応2年（1866）3月「英国歩兵練法」を翻訳して名声を高めた。
- ・ 小三郎は、慶応2年（1866）10月京都で海舟と対面し、私塾を開くとともに、薩摩藩や会津藩からの要請で英国式兵制改革を指導した（後に薩摩藩からの要請で「重訂英国歩兵練法」を翻訳）。幕府からも、幕府開成所教官にスカウトされたが、上田藩はこれを固辞した。
- ・ 小三郎は、慶応3年（1867）5月、幕府、薩摩藩、福井藩に「建白七策」を提出し、議会制度の採用など、日本に合った新しい政体構想と国家のグランドデザインを提案した。
- ・ 小三郎は、幕府、薩摩藩、会津藩の三者間を調停する中、上田藩からの帰国命令でやむを得ず帰国することとなったが、薩摩藩は、慶応3年（1867）9月、軍事機密が漏れるのを恐れ、小三郎を暗殺した。
- ・ 幕末史には、まだ知られていないことが多く、小三郎のような人物がいたことを、歴史学だけではなく、政治学など他の分野の方々を含め、広く世間に知ってもらうことが大切である。

### 第37回赤松小三郎研究会

日時：2021年10月9日（土）午後2時～3時半

#### ○ 八木剛介の筆録「田原記聞」を読んで一赤松小三郎の号令詞について（その2）

- ・ 報告者：石川浩氏
- ・ 概要：2020年2月8日の関良基氏の報告を受けて、岩崎鐵志氏の「八木剛介筆録『田原記聞』」を分析調査した結果として、次の諸点が報告された。
  - ・ オランダ語を訳した「田原記聞」にある号令詞と英語を訳した小三郎の「英国歩兵練法」とに類似したものは確認できない。
  - ・ 一方、「田原記聞」と同時期にオランダ語を日本語訳した徳広幸蔵の資料には、小三郎が訳した号令詞と類似のものがある。
  - ・ いずれにせよ、小三郎や八木剛介・徳広幸蔵が訳した日本語の号令詞は、近

代学校教育での「兵制体操」に導入され、現在に至ったといっても過言ではない。

○ 上田市立博物館における赤松小三郎遺品の展示状況

- ・ 報告者：荻原貴氏
- ・ 概要：2021年10月2日、上田市立博物館赤松小三郎常設展示において、当研究会有志の協力により上田市が購入した小三郎の次の3つの遺品が展示されていることを確認した旨が報告された（いずれも「赤松小三郎 所用」との説明あり。）。
  - ① ミニエー銃
  - ② 幕府海軍弾薬箱
  - ③ 八分儀

(注) 小三郎の遺品については、上記3点に加え、測量器具等についても、当研究会有志の協力により、上田市が購入している。

**第36回赤松小三郎研究会**

日時：2020年2月8日（土）午後2時～4時

(1) 伊能忠敬作成の伊能図の紹介

- ・ 報告者：杳掛忠氏
- ・ 概要：伊能忠敬が1800年～1816年に日本初の実測により作成した「伊能図」について、「大図」、「中図」、「小図」の3種類があること、忠敬の実測を基に、1821年に幕府天文方の手で「大日本沿海輿地全図」が完成したことなどが報告された。

(2) 赤松小三郎と銃

- ・ 報告者：関良基氏
- ・ 概要：上田市立博物館に寄託した小三郎の遺品3点（「八分儀」、「背負弾薬箱」、「ミニエー銃」）についての概要の説明が行われた。
- ・ 長崎以降の小三郎の翻訳書には、「新銃射放論」（ミニエー銃の性能、仕組みなど新銃の技術論）、「矢ごろのかね」（命中率向上のための射撃マニュアル）、「選馬説」（軍馬の育成）、「英国歩兵練法」（新銃に対応した散開戦の戦闘マニュアル）があるとして、各々の概要が説明された。
- ・ 特に、「新銃射放論」については、ミニエー銃の性能を広く紹介することが翻訳動機であったこと、速やかにミニエー銃の製法を習得して国産化し、順次配備していくべきと訴えていること、付録として日本初の可能性のあるミニエー銃の分解図が付されていることなどが説明された。
- ・ 赤松の軍隊号令の起源が八木剛介著の「田原記聞」にないか調べる必要があることが指摘された。

# 赤松小三郎講演会のご案内

2022  
12月10日  
(土)

## 講演テーマ 赤松小三郎の立ち位置

公論と暴力の比較史を背景に

講師 三谷 博氏 (東京大学名誉教授)

幕末、信州上田藩士赤松小三郎は、京都で開いた洋学塾などで多くの英才を育てるとともに、わが国の近代化に向けてのグランドデザインを描き、その実現に力を尽くしました。

残念ながら、赤松は、1867年(慶応3年)、37歳で志半ばにして暗殺されましたが、その先進的な政治思想と優れた洋学の教えは日本の近代化に大きく貢献しました。

当研究会では、今回、東京大学名誉教授で、19世紀の日本近代史などがご専門の三谷博氏をお迎えし、「赤松小三郎の立ち位置—公論と暴力の比較史を背景に」をテーマにお話をお伺いします。



赤松小三郎 上田市立博物館蔵

日時：2022年12月10日(土) 講演14:00~16:30(受付開始13:30)

会場：日比谷図書文化館 地下1階コンベンションホール(裏面案内図ご参照)

参加費：1,000円(当日会場受付にて申し受けます)

定員：100名(先着順 お早めにお申し込みください)

### 講師 三谷 博氏 (東京大学名誉教授)



#### 略歴

1950年生まれ。東京大学文学部国史学科卒、東京大学大学院国史学専門課程博士課程単位取得退学。文学博士。

1979年学習院女子短期大学専任講師、1995年東京大学教授、2015年東京大学名誉教授、東洋文庫研究員。

「明治維新とナショナリズム 幕末の外交と政治変動」(1997年サントリー学芸賞)、「明治維新を考える」(2012年)、「維新史再考」(2017年)、「日本史からの問い」(2020年)など著書多数

### 講師からひとこと

学生時代に上田城を訪ねたとき、赤松小三郎の碑を見つけて、その先進的な生き様に感銘を受けたことがあります。

この度、ご縁あって彼を記念する講演会にお招きいただき、とても光栄に思います。演題はその生涯の最後に起きた事件をもとに設定しました。

議会による決定は暴力ぬきに国家を統合する重要な工夫ですが、その提案自体が暴力を誘発し、命を絶たれた。

実に残念かつ不条理なことですが、これは革命にしばしばつきまとう普遍現象でもあります。

いま進めている「公論と暴力」を主題とする革命比較の国際研究会の成果を背景に、明治維新で「公議」「公論」と暴力がどう絡み合って展開したかを解説し、その中に赤松小三郎を位置づけてみたいと思います。

お申込は

赤松小三郎研究会事務局 (Eメールで事前のお申し込みをお願いいたします)

Eメール：[kannazuki-6318@kxb.biglobe.ne.jp](mailto:kannazuki-6318@kxb.biglobe.ne.jp)

(お名前、ご住所、本講演会をお知りになったきっかけなどご記入ください)

Eメールをご利用できない場合：電話：070-2685-2384 (事務局 小山)

(提供いただく個人情報は講演会の案内などの目的で適正に取扱うとともに、目的外利用はいたしません)

主催 上田高等学校関東同窓会赤松小三郎研究会



## 赤松小三郎【天保2年(1831年)～慶応3年(1867年)】

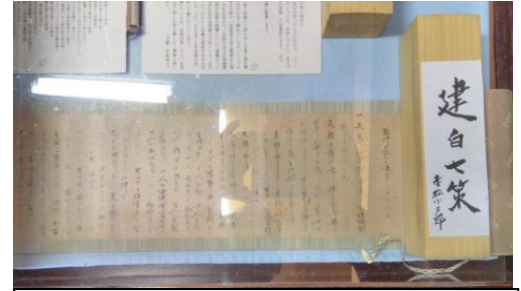
幕末の信州上田藩士。江戸に出て内田弥太郎、下曾根金三郎に師事し、数学、天文、測量、暦学、蘭学、砲術を学ぶ。その後勝海舟に入門し、その侍として長崎海軍伝習所で航海術などを学ぶ。さらに横浜で英国士官アプリンから英語、英国兵法などを習う。

幕末の京都で開いた私塾や薩摩藩邸、会津藩邸で洋式兵学を教えた。諸藩より学ぶ門下生の数、800余名。その中には東郷平八郎元帥、上村彦之丞大将など日清、日露戦争で活躍した諸将が含まれる。薩摩藩島津久光侯の委嘱により「重訂 英国歩兵練法」を翻訳した。

慶応3年5月、前政事総裁職（前福井藩主）の松平春嶽侯、島津久光侯及び幕府に建言した「建白七策」は、今後の政体構想と国家のグランドデザインを描いたもので、政治史のなかで輝いている。

天幕一和、諸藩一和のもと上下二局の議政局により内憂外患のこの時期を乗り切る方策を模索し、西郷隆盛や徳川慶喜への働きかけを行うなど、最後まで東奔西走したが、明治維新直前の慶応3年9月、京都において弟子の薩摩藩士桐野利秋らにより暗殺された。享年37。

上田市（上田城跡公園内）に赤松小三郎記念館がある。



建白書複製（赤松小三郎記念館）  
原資料は鹿児島県歴史史料センター  
黎明館蔵



### ■会場のご案内

〒100-0012

東京都千代田区日比谷公園 1-4

日比谷図書文化館（地下1階）

日比谷コンベンションホール

（大ホール）（旧 日比谷図書館）



都営地下鉄 ● 三田線「内幸町駅」A7出口／徒歩3分  
東京メトロ

● 丸の内線 ● 日比谷線「霞ヶ関駅」B2出口／徒歩3分

● 千代田線「霞ヶ関駅」C4出口／徒歩3分

JR「新橋駅」日比谷口（SL広場）徒歩10分

※当施設に駐車場・駐輪場はございません。公共交通機関をご利用下さい。

## 会場から



講師の三谷 博氏



会場の様子